

研究

龍溪矢野文雄先生 (一)

佐伯史談会

賛助会員 山内武 麟

序

龍溪矢野文雄先生は、おが郷土佐伯が生んだ第一級の
大人物であるといつても、決して過言ではあるまい。机
上の辞書「広辞苑」をひもとくと、矢野先生について次
のように出ている。

也のーりゆうけい (矢野龍溪)

政論家・小説家。

大分県人。民権論者。大隈重徳の知遇を受け官
途に就いたが、後、新聞界に入り、報知新聞社
長、大阪毎日新聞副社長。小説「経国美談」「
浮城物語」「新社会」など。(一八五〇—
一九三〇)

佐伯人で、人名辞典からいざ知らず、この広辞苑に載
っている人は、おそろく矢野先生が唯一人である。

矢野龍溪先生は、明治初期に於ける新しい日本の建設
に貢献された政治家であり、経国美談や浮城物語などの
小説を書いて、洛陽の敏徳を高めた文豪者であった。ま
た先生は、新聞人として、思想家として、将また官吏と
して、偉大な足跡を残している。

瀨沼茂樹氏の書いた「矢野龍溪」と題する文の中に、
矢野龍溪とはどんな人かと問えば、三宅雪嶺が「龍溪隨
筆」(明治四二(一九一〇)年刊)に与えた序文をもつて答えるが早い。

簡單ではあるが、極めて要領を得ている、と書いてある。
その三宅雪嶺の評言というのは次のようである。

「同年に生まれ、同じく大志を抱き、同じく政界に投
じ、而して性格境遇を異にするの甚なりき。矢野龍溪
君と故星日生(星亨のこと)との如きは無し。矢野君
に幾分か日まのの分子を加ふれば西園寺侯(公望のこ
と)と為り、星に幾分か龍溪の分子を加ふれば桂公(へ
太郎のこと)と為る。

俗に一押二男三金といふは、卑猥ながら少く理あ
り。日星はおくまで押し強き、謂ゆる押し通るの名
に背かず。龍溪は品の備はり、朝に名臣、野に高士と
するの風あり。日生の成敗は余れるよりし、龍溪の成敗
は押し足らざるよりし、過ぎたるは猶及ばざるが如
し。もし龍溪にして今少しく押し強からんか、到着
する所殆んど測り知るべからず。

矢野君の漢学的方面を得て一層押し強きは犬養木
堂、其洋学的方面を得て一層押し強きは尾崎号堂、
共に押しにおいて優り、而して達観は如かず、従容は
如かず。

矢野君は識力の秀で、視聽して理解せざる無く、唯
だ理解する所強て活用するを欲せず、政党に、新聞に、
文学に、社会政策に、一步若しくは数歩先に先んじつ
つ、その成果を見ずして去る。(中略)

矢野君は政界に精力を注ぎて政治家として傑出し得
たるべきと同様、学界に精力を注ぎて学者として傑出
し得るべく、あるいは芸術に精力を注ぎて芸術に卓
越したるべし。星は頭脳の粗なりには拘らず、精力を
以て彼の如きを致せり、精力の効用也多し。しかも傑
出し得べくして敢て傑出せんとせざるは、偶々気品の
高きを証明せずとせず。」

と。

この雪嶺の評言に見られるように、矢野先生は政治家として、は押し通す足らないところが有り、しかも事を成してこそ、成果を見ないで去ってしまうようなことが多かつたかも知れないが、何人よりも才力な知能と識見をもつて、誰よりも一歩、いぬ数歩先んじて、進むべき道と指し示し、啓発しておられた。まことに先見の明に富んだ大先輩者であつたといふべきである。かかる先輩者を大先輩としてまつことは、あが郷土佐伯の誇りといふべきである。

浅学菲才な私ごときも、おこがましい限りであるが、先生に對する参考資料をおれこれとあさり、その中から抜き書きして、龍溪矢野文雄先生の略伝をたいすものと綴つてみたいと思ふ。

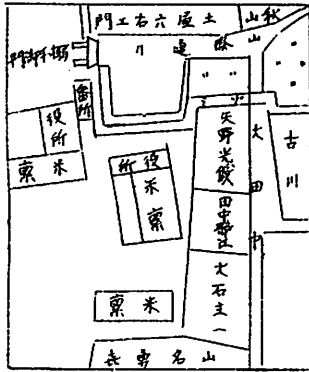
(参考資料)

- 「龍溪矢野文雄君伝」 著者 小栗又一 昭和五年四月発行・著者小栗又一氏は先生の令弟に當る人である。即ち先生の令弟小栗貞雄の令息である。昭和二年三月大阪毎日新聞社で矢野文雄先生の伝記を編さんすることが決まり、小栗又一氏が委嘱されてこの書を書きまとめたものである。
- 「矢野龍溪」 論者中根貞彦 昭和二十九年十月発行
- 「経國美談」上、下 (岩波文庫) 主として上巻の巻頭に在る 解題「矢野龍溪—人と作品」 経國美談を中心として 著者小林智賀平
- 「党人郷記」の南海郡那の巻 著者 衛藤 庵 昭和八年十一月発行。

○「明治百年大分県の歩み」 毎日新聞社 昭和四十三年九月発行 生い立ち

嘉永三年(一八五〇年)といふは、孝明天皇が御祚せられた第五年、十二代将軍家慶の時代である。内には尊王論、攘夷論が次第に高まり、外に於てはしばしば黒船が来航して通商を求め、物情驟然、太平の夢は破られんとする頃である。この年の暮十二月一日に龍溪矢野文雄先生は、あが佐伯で孤々の声をあげたのである。龍溪先生は純粋な佐伯っ子である。その誕生された地は佐伯小学校の校地内にある。現在、佐伯小学校の北側、城山への登り口を面したところにある出入口の城山に向つて左側に「龍溪矢野先生誕生之地」という石碑が立つているが、其地ではない。今は佐伯幼稚園の園舎が建てられておる東北隅の大田中通りに面した地で、鐵前には奉安殿があり、土俵場があつた場所である。

ここに先生が生まれた矢野家の邸宅があつたのである。誕生之碑は、以前この場所の片隅に建てられていたが、園舎建設のため現位置に移されたのである。(図参照)



明治四年佐伯藩蔵敷園に見る

矢野文雄先生誕生の地

上図の如く、大田中から山際通りを通ると、今も残つてゐる藩に於いて、矢野先生のお生まれの蔵敷があつた。

今ある先生の他、碑石(大石)の建てつてゐる場所は誤つてゐる。しかし、お祈を見たい位置に於ては、お祈を

石塚には、次のように刻まれている。

龍溪矢野先生誕生之地
舊藩主毛利公所賜之邸地也
先生祖父多門藏父光儀之
若居之先生因寄附以為本校
之屬地也矣

明治四十五年一月建設



この碑文にあるように、この土地は矢野先生の寄附によつて、佐伯小学校の校地となつたのである。

龍溪先生が生まれたときの藩主は毛利高恭公で、祖父は光暉（通称多門）、父は光儀（通称程藏）、母は駒子（佐久間氏）といひ、先生は六人兄弟中の長男であつた。

矢野家は高い門調の出で、中士の格であつた。祖父多門の祖父にあたる矢野黙齋といふ人は、矢野家の第四代目にあたり、矢野家中興の祖ともいふべき人であつた。有名な漢学者で、「論語古訓便説考道」の著があり、藩校四教堂の教頭として藩の文教を司り、人材の養成と、文運の興隆に尽力し、その名は藩の内外に知られてゐたといふ。豊後「和漢三才図会」にも記されてゐる。よつて、昔から河童の伝説が多い。佐伯などには川があるのでその伝説も少なくない。ところが黙齋先生在世のころは、城下の外濠に夜な夜な河童が現れて、論語を講釈する真似をした。河童が講書の真似をするときは、いつも「我は黙齋先生なるぞ」といつたといふ伝説が、その頃の語りぐさであつたと伝えられるが、それほど先生の名は一級民衆にも知れ渡つてゐたといふ。

祖父の多門といふ人は、少年の頃、親兄弟に死別して孤兒となり、物心つかぬ頃から艱難をなめた。伯父に引取られて養育されたが、艱難の中に培われた不屈の

精神で勉勵し、文武両道に長じて氣節高い武士となつた。時の藩公は多門が有用の材であることを見て、終僅か二十四才のこの青年を目附役に抜擢して江戸詰を命じた。しかし、この人の性格は峻厳過ぎ、固苦しい古武士のような所があつたので、人から敬遠され勝ちであつた。江戸では志を伸ばし得ず、故郷佐伯に帰つたが、余り重用されなかつた。多門は融通のきかない頑固な人であるから、世情に暗いかと思つた。中でも尺八が最も得意で、江戸に居た頃、虚無僧姿をして吉原あたりを歩きまわつたと伝えられている。また横笛の名人で、文雄先生も幼い頃、この祖父の吹く笛の音にうっとりさせられたことがあつたといつてゐる。多門はまた狂歌にも長じてゐたといふ。このように無風流、無趣味のどくか坊ではなかつた。また幼い頃から苦勞して育つたためか、思いやり深く、涙もろいところもあつたといわれる。

父光儀は、祖父多門によつてかけ替へのない一殺種であつた。父多門が江戸詰であつたので、江戸で、父の友人塩谷宗蔭から漢字を、長沼笑兵衛から剣道を学んだ。負けぬ氣の強い多門は一人息子の光儀に、怒ての望反を付けてびしと鍛えた。きびしい儒教的な訓練をしてゐたのである。史記に詳しい多門は、折にふれては古今の英雄について語り、光儀を感奮させてゐた。光儀は父とはちがつて、寛容温和で人に好かれる性格であつた。小さい時から秀才の譽れが高かつた。成人して光儀は藩の回家老佐久間藏右衛門の娘駒子を迎えて妻とした。藏右衛門は学問に長じ、又政治家肌の人で、当時藩の実権を握つてゐたので、光儀はかれ自身材幹に加えてこの岳父のひかりで、若くして藩政に参興する地位に上つた。初めは側役小納戸となつて藩主の

側に控え、その次は、滿奉行となつて佐伯藩の蔵入の重
 なるものである漁獲物整理の任に當つた。次いで御郡代へ
 郡奉行となり、町奉行を兼ね、更に重役に列して最高
 の藩議に与つた。彼が町奉行として裁判に當ると、民間
 では彼に「重忠孫」という^{縁名}縁名をつけた。これは芝居の
 阿古屋琴黄めの段で、萬山重忠の名判官ぶりをうたうが
 それにもじつてこころした縁名で珍んだのである。それ
 ほど名判官ぶりを發揮したといわれている。

またたま王政復古、明治維新となつて、藩の文藝者秋
 月橋門は朝廷に召されて、下総葛飾縣知事となつた。橋
 門は光儀の行政に於ける力を充分知つてゐるから、これ
 を推薦して同縣の大参事とした。それから間もなく同縣
 知事に昇任した。かくして光儀は官途にいたつたのである。

光儀という人は何事にも要用な人で、詩文にも武芸に
 も長じていたばかりでなく、歌舞まで通じていて、文雄
 先生が幼い頃、祖父多聞と父光儀が、横側に並んで坐り、
 月に向つて互に横笛を合奏していたそうである。

祖父多聞は文雄先生が二十一才の年に歿したし、父光
 儀は三十才の時に歿した。言うならば先生はその青少年
 時代を、祖父と父との温かい薫陶の中に成人していつた
 のである。

祖父の教育は、孫文雄先生の額にある五六の墨子とさ
 して「お前は北斗七星の相がある。この相のあるものは、
 やがて世を救ひ、名を千載に残すものになる」といつて、
 自負心を植えつけ、また宋の銭若水の言葉「高尚の人は
 名位を以て光寵となさず、中正の士もまた窮達のため
 志操を變ぜず、その或は鶯祿恩遇の故を以て忠を上に致
 すは中人以下の者のなす所なり」を引用して、濟世經國
 の志を養ふことであつた。

父光儀は漢籍のみならず洋訳書にも通じていた。種痘

が長崎に渡つてきたのは恰度その頃で、光儀は率先して
 佐伯藩に採り入れた民どの進歩派であつた。先生が八九
 才の頃、父から「ロビンソン漂流記」などを讀み聞かせ、
 入れていたといわれている。

要するに文雄先生は、祖父から和漢の学を説き聽かせ
 れると同時に、父光儀からは絶えず西洋の新知識を注
 された。祖父と父から廉と寛との性格をうけついで先生
 は、また同じく祖父と父から、東と西の學問を授けられ
 たのである。

文雄先生は、八才から藩校四教堂に籍をおき、広瀬淡
 窓の門を出た折衷學派の秋月橋門と、帆足万里の流れを
 くむ楠文蔚とから漢学を學んだ。

ある日秋月橋門先生が十才前後の兒童を集めて、テス
 トをやつたことがある。

「京都の知恩院という大きなお寺がある。その庭は大
 勢の子供たちの遊び場所にもなつてゐる。ある日一人
 の老人がそこへ来て子供たちに向ひ、遙に寺の庭根の
 瓦の軒口を指して、みんなのうち、誰でもあの瓦の列
 が續行あるか、間違ひなく答えることができれば、
 うんとご褒美をあげようといつた。誰もかれも思案に
 くれてゐると、左一人、後から進み出た子供が、正
 しくその数をいい當てる方法を答えたので、老人はこ
 の子に約束の褒美をやつた。もしお前たちが、假にこ
 うした問を受けたとしたら、一体どういふ方法でかぞ
 えるか。」

とたずねた。八九才から十一二才までの生徒がかなり大
 勢いたが、誰一人として答えるものがない。みんな
 だまつて首をひねるばかり。すると、そのとき九才の文
 雄先生が、すつと立ち上り、

「先生、雨が降ればその軒から長い滴が落ちるでしよ

う。滴の痕はきつと下の石にっいているでしよう。だからその痕を数えれば、瓦の行旅が分かると思ひます。」と答えた。秋月先生もこの無邪氣な答へには思はずふき出してしまった。

「君たちの家のような、小さい低い家の屋根から落ちる雨滴なら、下に痕も出来ようが、智恵院の屋根は数丈の高さである。従つて上から落ちる滴が地上に届くまでには、もう散つてしまつて正確な痕きとどめないであらう。さつき話した老人から褒美を貰つた子供の答へは、太陽の照るとき地上にうつる新口の影を数えたら、確かな数があるといふのであるが、矢野の答へは雨、この子供の貝着、矢野のはこの子供の答へはど正確とはいへないが、まずその次ぎぐらいとしておく。」

といつた。秋月はこのことを人に語り、「この子には奇才がある」と称したという。先生は幼少の頃から穎才に富み、その将来を注目されていた。

文雄先生は、祖父と父との紐さうけて、言葉は常に辯さ抜いて、いつも自分より年上の組に入れられ、この者たちと競争していた。その頃の先生はなかなかの理屈屋であつた。古人の言葉に「持は情語、文は理語」とあるが、理屈屋の少年文雄は、文章を喜んで作つたが、詩作はあまり好きでなかつた。味道的な情操の中に住むより、朝夕その胸中に出來するものは、古今東西の英雄の面影であり、政治家の言行であつた。政治、兵制、そのいつたものに關する文獻は、貪るよりに讀み耽つた。先生は勉強家であつた。いつも一二を争う抜群の成績をおさめながら、息もつかずに學問に励んだ。幼い頃は「理屈が多く、かしこすぎる」といわれてはいたが、十五六才の頃から広く史書を漁つて、古來の大人物を欽慕するよう

になる。拳勇が落着き、おしる寡言の人となつた。「性格が見る是るうちに変わり、幼年時代と青年時代とではまるで別人のようだ。こんな人はめずらしい。」と藩の先輩たちは注目していたという。

先生は詩文を藩校で學ぶと同時に、擊劍場に通つて心影流の劍を學んだ。十才頃からはじめたが、十五六才頃には既に目錄を許される腕前になつた。

先生が十三四才の頃は、攘夷論が天下を風靡していた時代である。いつ、どこの黒船と砲火を交えなければならぬかとも知れぬ、いつ、どこの國と鐵端が聞かれるかも知れぬ、……といふかで人心恟々として、夜も安らかに眠れぬ時代であつた。各藩では、令吏のごとくおわてふためいて、洋式の兵制を布き、珍妙なダンブクロさはいりて、俄かに訓練をやりだした。佐伯藩は長崎に近かつただけに、いち早く時代の動きを知つて洋式の兵制をとり入れた。その頃まだいたいな少年であつた矢野先生も、こうして銃砲術を學ばされた。先生は大砲の射撃を好み、その研究に没頭した。二十四斤カノンや二十寸の榴彈砲や、時には輕便な臼砲を一生懸命に研究したのである。信管の詰め方とか、距離によつて信管の長短をきめるとか、實際の技術の練習にも急がなかつた。しかし何分にも佐伯藩は小藩であるから、砲車を突がす馬を与えてくれない。砲は馬の代りにみんなが手で曳くより仕方がなかつた。野外演習に出たとき、僅か三四人で砲車を曳いて坂を上つたり、泥濘の中を渡つたりするのは、並大抵の苦勞ではなかつた。まして先生はまだ十五六才の少年であつた。先生の思ひ出話にこの時のことが出ると、「どうも馬の代理には開口した」と笑つておられた。

先生はまた小銃をも好んだ。好きであつたのでいつか

間にか相当な歳前になつた。佐伯藩では、中士以上で砲術師範の免許を受けなくては、銃獵をすることを禁じていたが、先生は十四才の暮、早くも砲術師範から砲術に精を出すと、こので銃獵の免許をよえられ、十五才の春はじめて雉子を撃つた。先生の祖父も父も銃獵が好きであつた。佐伯藩内の大入島は今でも雉子の産地として有名であるが、ちようどそこに先生の家の別荘があつたので、先生は祖父に伴われて雉子撃つたことについて「西遊漫記想起録・隨筆雜纂」(明治三四、二一七列)に書き記してある。これを讀むと、少年時代の先生の面目がよくあらわしていて面白い。

この頃、銃砲はすでにゲベル銃が使用されていたが、銃獵には雉子の小さいのがよかつたので、口径二匁五分内外の火繩銃がもちいられてゐた。文雄少年も火繩銃をもちい、銃獵の作法にしたがつて実丸を装填した。しかしはじめの銃獵はうま損じては面目ない、万全を期して実丸の上に大粒の散弾を六七粒こめておいた。三時間おまりして、見事に一羽の大きな雉子を射とめた。文雄少年の喜びはもちろんのことであつたが、祖父もまた大いに喜んだ。そこで一兩日の後、孫の初獵を祝つて知人を招き雉子を馳走することにした。ところが、いざ雉子の料理にかかつてみると、雉子に弾痕がない。よく調べてみると眼のところに一点散弾のかすかな痕があつた。これで散弾をもちい危くしとめたことがわかつて大笑いになつた。しかし、祖父は初獵に雉子とは幸先がよいと、しよげる孫文雄を勵ましよと、いふことである。

慶応元年(一八六六年)、矢野先生は十五才にして初めて仕途につき、藩主の左右に侍する側勤を命ぜられた。幾

何もなく徳川慶喜は大政を奉還し王政復古となり、明治元年(一八六八年)一月には伏見鳥羽の戦が起こり、二月五日には幕府親征の詔が下された。各藩主はことごとく上洛することとなり、佐伯藩主毛利高謙公もわかには京都に向つて出發し、先生もこれに扈從して入洛した。その頃朝廷には親兵といふものかとのつていなかつたので、藩の大小に依つて兵を徵集したので、佐伯藩からも青年武士と五六名えらんで差出しよが、先生もその中の一人であつた。

親兵の一人となつて禁裏御門の警衛に従つたが、間もなく拔擢されて分隊長となつた。先生はその時年僅か十七才、まだどこか産毛の香りがする紅顔の分隊長であつた。しかし間もなく先生は帰國を命ぜられた佐伯に帰つた。その翌年、父光儀は前記したように葛飾県大参事となつて任地に赴いたので、先生は祖父と母に任せて家を守ることになつた。その頃の先生は藩内に於ける青年組の領袖であつた。かつて藩士の潮で、兵隊組と学友組とが相対峙して争つたとき、先生の学友組の首領として、藩の氣政黨を支持し、對手に抵抗したものであつた。

しかし、先生の佐伯に於ける生活は長く続かなかつた。明治三年(一八七〇年)一月、父光儀が葛飾県知事に栄進されたので、一家を挙げて上京することとなり、先生は一切の整理を行い、八十二才の祖父多門を奉じ、全家族を率いて、思ひ出深い誕生の地佐伯をあとに東京まで旅立つたのである。この旅行はどこからか船に乗つて横浜まで行つたのであろう。古い報知新聞記者の篠田敏造といふ人が書いた「明治百話」といふ本の中に、矢野一家が横浜に上陸した時の様子を次のように書いてある。

先ず一行は八十二才の祖父多門翁、この翁は白鬚を脚に垂れてそれを錦の袋に包んでおられた。多門翁の

御内室、それから文雄氏がまだ二十一才で大小をたはさみ、同氏の許嫁、同姉君、同弟貞雄、後の小栗氏は十才で、頭髪は紫の打紐で束ね、若衆作りに義経袴といつたいでたち、その他弟君と女中若党といふ大家族……(守畧)……横濱にはイギリスの赤隊が此していら頃として、港のあたりをうろついている兵隊が、矢野家一行を見て、第一に多門翁の錦の袋を見て、何だとはいふようすにいぶかるので、袋をとつて見せる……云々

この文の姉君とあるが、先生には姉君はなかつた。先生の兄弟は前記したように六人である。小栗又一着「龍溪天野文雄君伝」の巻頭を飾る写真の中に、「大正三年矢野邸内の桜花満開の下に先生の同胞六人集団せし」といふのがある。それを見ると、先生を頭にして、二弟武雄、三妹峯子、四弟貞雄(小栗)、五弟為雄、六弟道雄であることがわかる。(この項おわり、つづく)

探訪記録

佐伯 四 回 雲場探訪 四

山も川も人を祖人の夢の跡

会員 佐 脇 貫 一

相江の江國寺を訪れたのは旧年十二月のことだった。それから二か月あまり、この無信心の巡礼者はいたずらに日月の過ぎゆくのを悔むばかり、過路廻國の志など蕉翁翁の百分の一もなし。さりながら

雲場かやりの企画は捨てたわけではなく、寒天におびえ、雨氣を葉に
ながら、おが毎日待ち望んでいた。

二月十八日、もはや陰曆の通用しない御時世をれば、どの農村も旧正月の白い日はない。自乗車を駆って行くは下野田地込泥谷部落、江國寺下の県道を市谷に出で、農道を大泥谷に向かえば、市谷の山端に天神社があり、その隣に墓地群がある。ここには泥谷邑の名門勝田家の墓所、歴代の奥津城は名家のよすがを残している。明治五年に組織され、同六年から九年まで九州各地を巡業して名声を博したといふ堅田の地獄言(歌舞伎芝居)市谷座の座元勝田五郎の墓もあり、その先人で儒者であり、医家であった人の墓もある。

泥谷部落の奥まった山裾にある正明寺、石階さの尻れは山門に「せに十字」の紋章がとりつけてある。龍溪山正明寺、寛永元年日向佐土原領主たつたといふ内田少将正明の子淨龍が創建したといわれる真宗寺院である。この寺は元堅田川をへだてた泥谷の対岸佐土原に建てられはじめ佐土原寺と号していたが、後正明寺と改めた。大正元年秋の大洪水で堅田川が氾濫、このあたりは一分の石礫となった。流失した正明寺はその法燈を持續する友め泥谷に移り、現在地に建築したという。

十八番札所の西光庵はこの正明寺の地続き、隣接地にある無住の庵、かつて禪僧も住んでいたよう、その余情は残っているが、今は破れ果てて見る影もない。境内の墓域は正明寺と共同のものらしいが、空齋、安永年間の大乗妙典一石一宇塔也、これを建てた庄屋沙月安右衛門惟貞、同じく安左衛門範香などの刻名、また沙月伴蔵の建てた空笠印塔(残骸)の記年から推察すると、西光庵は少なくとも旧幕藩時代は浄土宗所屬の寺庵で、比較的近年(明治時代)江國寺末となったものと思われる。そ